

教養教育のありかたと歴史教育の重要性について

－対象を相対化する視座と能力の涵養の場として－

芳賀 満¹⁾

1) 東北大学高等教育開発推進センター

I. はじめに

一つの真理でなく幾つもの事実

弱い存在である我々人間は一つの真理に縋らざるを得ない。それはネアンデルタール人の頃に「埋葬」と「墓」という概念装置が発明された時¹⁾、つまりは我々が「死」を認識するようになって、完全な動物ではなくなった時からのことであろう。特に愛する者の「死」を体験し、且つ自分の不可避の「死」を認識するようになった我々は、それによる精神の崩壊を防ぐために「天国」とそれを支える「宗教」を発明した。これは科学技術史上での「農業」と並ぶ、人類の精神史上の最大の発明であろう。

しかし宗教的真理は、少なくとも国公立大学で、唱道し学生に信奉させ学習させる目標ではない。キャンパスには絶対的真理はなじまない。

一方、いわゆる受験勉強における定型的思考、受け身の知識・技術習得から、多様な視点からの思考、能動的で行動する学習への「学びの転換」が大学では重要である事は、特に東北大学の研究型少人数教育（基礎ゼミ）によって強調され、既に実施され多くの成果を生んでいる²⁾。

つまり一つの真理、絶対的正解ではなく、複数の事実と解釈があることを大学では教えるべきである。それこそが大学での学びであり、思想の独立宣言であるデカルトの『方法序説』爾来培ってきた近代精神に則った学問の姿である³⁾。

そのような視座を獲得する事は、専門教育ではむし

ろ難しいので教養教育⁴⁾において目指すべきであり、専門教育を経て大学を卒業する学生（その後専門研究者になるのであれ市民となるのであれ）の最終的な総括的目標とすべきことである。

相対化の視座と能力～教養教育での涵養

以上のような「学びの転換」を促し「多様な視点からの思考」⁵⁾を会得させるための、スキル、ティップスは多く提言されており、たしかにそれらは実務的観点から貴重である。しかし一方でそれらは表面的なマニュアルでしかない側面があることも否めない。

すると、信仰でもマニュアルでもなくその中間に位置し、誰もが分かち合える普遍的で価値のある総括的な視座、文系と理系を問わず、また在学中と卒業後を問わずに広く個人と社会に益があると思われる考え方は何であろうか。どのような認識深化の方法、主観の研ぎ澄まし方が設定できるであろうか。絶対的真理に縋らずにこの世に自分で立つ強さ、一つの真理を信奉するのではなく幾つもの事実に自ら当たり対処する体力、それをどこに設定してどのように育めば良いであろうか。

それが、学問対象あるいはこの世界を相対化して認識する視座であり、幾つもの事実を客観的・批判的に判断し統合する力、即ち「相対化する力」である。その能力の涵養が大学教育、特に教養教育において必要なのではないだろうか。

教養教育では実用的な「住宅地図」ではなく、世界観としての「世界地図」を教えることに意義がある。

*）連絡先：〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 高等教育開発推進センター人文社会科学教育室 mhaga@m.tohoku.ac.jp

相対的視座によって描かれる「世界地図」の幾つかの事例を本稿では検討する。

「教育」の定義～狭義と広義

そもそも教育とはどのような行為だろうか。古代ギリシアには2つの「生」の概念があった。タナトス(死)に対置される一回限りの個別の有限の生である「ビオス(βίος)」と、個体を越えて連続する無限の生である「ゾーエー(ζωή)」である。

この「ビオス」から「ゾーエー」へと繋げる行為として、個体としては「性」、社会としては「教育」があるのではないだろうか。(個の死を越え永遠に繋がるから共に聖的行為でもある。)つまり社会の存続方法と文化と技術革新の継承方法が、社会の観点からの広義の「教育」である。

本稿では「教育」を、学校教育を意味する狭義と共に、それにとどまらない上述のような極めて広い意味にも定義して扱ってゆく。

相対化～理系学問のみならず

たしかに相対化それ自体は何も新しい視座ではない。そもそも特に理系の学問の特長として、対象を相対化する視座が既にあることが指摘できる。対照実験、対照群、コントロール等は、自分の理論や仮説に対して設定された相対的視座に他ならない。しかしそれは実験や観測による再現性があるゆえに、K.R.ポパーの言う反証可能性が成立する理系の学問において、特に設定される視座であった。

人間界の現象を対象として実験や観察を行うこともある社会科学はまだしも、再現性も反証可能性もないところに成立している狭義の人文科学においては、「対照実験」などは設定のしようもない。歴史は一回限りであり、繰り返さないからである。しかしだからこそ相対化の視座を意識する事が、狭義・広義の人文科学のもたらす成果に説得力を付与するのであり、そこにこの視座を積極的に導入する意義がある。ではどのような概念空間に、相対化の視座を設定したらよいのだろうか。

原始・古代史の意義～遠識からの/への視座

我々全員が現在に生きている以上、時間軸の上でそこからなるべく遠くの原始・古代に視座を置く事がまず有効である。対象(人類とその歴史全体)から距離を置いて引いて考察するためには「最大距離」を得る事が重要だからである。瞳孔距離が6-7cmの人間よりも、15mの間隔を誇る戦艦大和の測距儀による三角測量による方が、より遠くを射程に捉える事ができるように、現在となるべく離れた過去に相対化の為のもう一つの視座を設置した方が、なるべく遠くに思考の射程を設定できる。対象を突き放すことを可能とし、同時に遠くまでくっきりと見据えることを可能とするのである。

勿論、歴史も河も、その上流・中流・下流のいずれもが同様に重要であることは言うまでもない。むしろ近現代史の方が、直接の因果関係を今日現在と持つ。しかし古代は源流であるがゆえに根本的課題を蔵し、同時に応用範囲が広く、ゆえに「住宅地図」ではなく「世界地図」を教える教養教育では極めて重要である。

しかし現代世界では同時代性・同時性という水平軸ばかりが重視されている。人びとは、今この瞬間ばかりに興味を持ち、特にインターネットで地球の裏側までの今のニュースを知ろうとクリックを重ね、簡単に軽く判りやすい情報を消費する事に快感を感じる。スポーツや流行、構造と善悪の判断が単純で判りやすい犯罪事件等を喜ぶ。世界の表面をフローする情報と、世界の底(図書館等)にストックされてゆく知識の違いを知らない。少しでも自分で考える力や知識が必要な事件に遭遇すると、それに向き合う力も習慣も無いために、「心の闇」と括って横に置きやり過ごす。

特に現代日本においてはそれが顕著である。都市ローマには古代の記憶がそのまま刻まれている⁶。ローマの伝説上の建国者ロムルスが殺された場所であるとの記憶を留めるニゲル・ラピスが残り、後79年に奉献されたコロッセウム、ハドリアヌスが後115~125年頃に再建したパンテオンが爾来建ち続けている。葡萄酒に酔い、立ち並ぶ家屋の不思議な湾曲に地図を取り出すと、そこがカエサルが暗殺された劇場の形を記憶した空間であることを知り、広範な世界を統治し食料等の効率的な分配に抛り平和に資する進んだシステムで

あった帝政に少し早く移行しようとして殺された男に思いを馳せる。石造文化であることが有利に働くのではあるが、西洋人は長い時間軸と共に日常を生活している。故に社会や国家に関わる重大な判断や決定に際して、時間軸に長く降ろした碇が安定のキールとして役立つ。

一方、日本の首都の中央駅の東京駅周辺の風景は数年の間に変化してゆき、記憶が20年も保たない⁷。個人の記憶でさえ脳内にのみ留まるものでなく、外部のモノによって形成・維持される。まして社会の記憶とは即ち構造物であり風景であり都市や風土そのものである。石造文化圏でない我々は諸行無常を哲学とし「行くものはかくのごときか昼夜をおかず」を愛吟し「水に流す」ことを美德とする。しかし少なくとも西洋社会では変化とはせわしないことであり、大人の顔と同様に街や風景が新しいという事はみっともないことなのである。水の流れひとつとっても、悠々たる河川を有し且つその多くが相互的しがらみの多い国際河川である西洋の場合と比べて、河も短い国内河川しかない日本では、思考の射程と構成が軽小短薄になる傾向が強い。(国際的な回遊魚のいる時期の海域への福島原発汚染水の放出は、そのような思考傾向による悪い事例である。)

勿論我々も歴史を積極的に取り上げる時もあるが、時間軸に降ろした碇が短いために、それは時に過剰に走る。過去を反省はしても断罪すべきでない。それは却って思考停止を惹起することが多いからである。石造文化圏でないからこそ、我々は西洋に於けるよりも積極的に過去を重視し同時に慈しまないといけない。

水平方向の軸ばかりに異様に長く過敏で、時間軸への垂直方向は極めて短い、このような日本市民の精神の姿は、大変にふらつきやすく不安定で脆弱である。水平軸と垂直軸の「積」が大きいことと、そのバランスが大事であり、特に時間軸へ碇を深く降ろすことが極めて重要である。“The longer you can look back, the further you can look forward”とは W.チャーチルの1944年の有名な言葉だが、過去に深く降ろした碇なくして未来への構想力は創造できない。

まして現在は、既に1972年にA.ワインバーグが定義したトランス・サイエンスの時代⁸、「科学によって問うことはできるが、科学によって答えることができ

ない問題群からなる領域」に突入して久しく、特に先端技術革新がめざましい日本社会は先端技術と社会とが不可分であるリスクを高度に負う。さらにその社会的リスクは国境を易々と越え且つ不可逆的である。

このような時にこそ国公立の総合大学は理系と文系の双方があることの意義を鑑み、文理融合を研究と教育の両面からより推進し、理系には原始からの歴史認識を抱かせ自分たちの研究に誇りを持たせると共にその成果がもたらすリスクを自覚させ、文系には過去に碇を降ろしそこから未来を汲み出し紡ぎ出す行為である人文科学研究への矜持を持たせるべきである。それが大学における教養教育の目的であり、国内と国際社会に対する責任である。

II. 相対的視座を適応した幾つかの事例

原始からの相対的視座～ヒトの相対化

では相対化の為に最も遠大な位置に設定した歴史的視座とは何であろうか。そもそも「歴史」の定義はいろいろあろうが、岡田英弘氏によればそれは「人間の住む世界を、時間と空間の両方の軸に沿って、それも一個人が直接体験できる範囲を超えた尺度で、把握し、解釈し、理解し、説明し、叙述する営み」⁹である。すると、「地球の歴史」、「恐竜の歴史」等という時の「歴史」はあくまで比喩的表現であって、「人間」が存在してから「歴史」が始まったことになる。

そこで本稿では最大射程を600万年前とする。その頃にチンパンジーやボノボの祖先から「ヒト」の祖先が訣別し独自の展開を開始する。つまり「人間」が誕生したのである。

勿論、文化史的には認識は異なる。「人間」とは自己とそのコミュニティーのみを中心とした極めて利己的な概念であった。キリスト教に視座を設定すれば、キリスト教の福音を受けていないヒトは「人間」ではない。コロンブスが「発見」した南北アメリカ大陸を征服したコンキスタドレスが「インディオ」を多数殺戮したのも彼らが「人間」でないからである。それは、人文主義者(ウマニスタ)として有名で、ミケランジェロには《最後の審判》を描かせた教皇パウルス3世が、1537年の勅書で「新大陸の住民も人間である」と宣言

するまで続く。これは全くヒューマンな思想ではないが、そもそもそれが由来する「フマニオール」(humanior = ラテン語「人間的humanus」)の比較級で「より人間らしい」の意)は、蔑視すべきhomo barbarus (「野蛮人」)に対する、優雅で文化的で徳と教養を備えたhomo humanus (「人間らしい人間、文明人」)を意味する排他的な概念である。

以上の、キリスト教の外にもうひとつの視座を設定した考察自体が既に、「人間」が文化的にいかに関係的な存在であったかを知らしめるが、では「ヒト」はどうであったろうか。

化石から推定されるヒトの系統樹(図版1)を概観すれば、別系統のヒトが何種類も400万年以上もの間、同時存在していたことを確認できる。この自覚により我々は自己存在の相対化を強制的に図ることとなる。我々は絶対的な存在ではないことを知り、自己存在の相対化とともに自己を客観視できる。

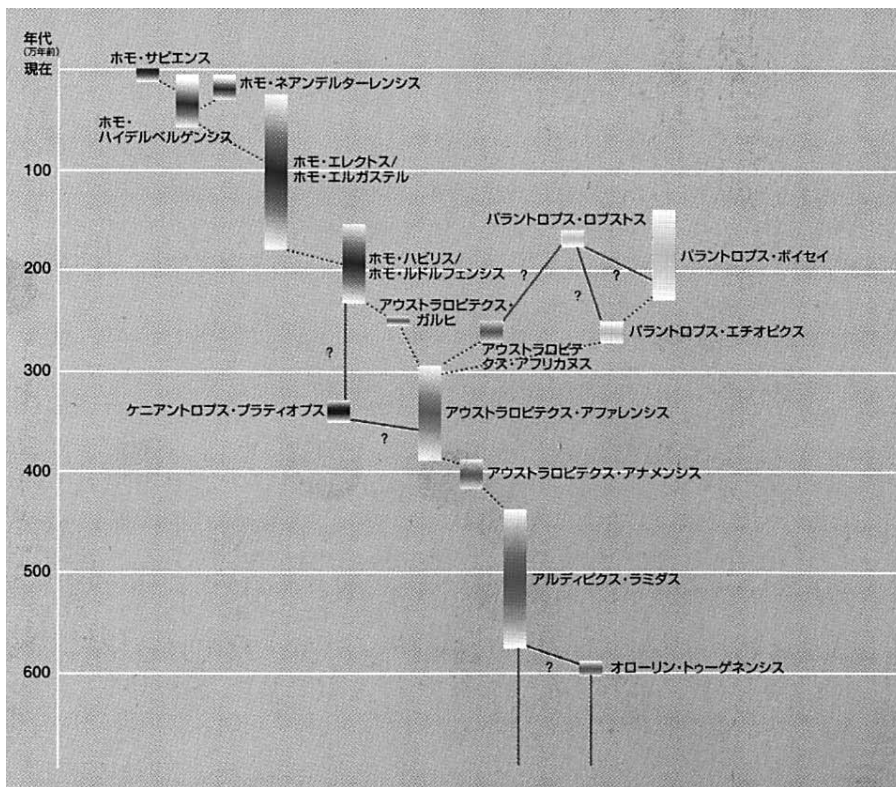
同時に、ホモ・サピエンスのみになったのは、ごく最近であることも確認できる。すると我々が相対的存在であることを既に自覚していれば、その状態は「絶対的」であると言うよりも「独善的」と捉えた方が適

正であることも了解できよう。

現在世界の表面を覆う我々現生人類への進化はアフリカのみで起こり、且つ極めて最近であることも判ってきた。従来は、アフリカにいた初期ホモ属である原人が170~150万年前に最初で最後のアウト・オブ・アフリカを果たして世界に拡散し、その後世界の多地域で新人ホモ・サピエンスへと進化してきたとする「多地域進化説」が有力であった。しかし近年、この1回目のアウト・オブ・アフリカの後に新人ホモ・サピエンスへの進化は15~10万年前にアフリカだけで起こり、その後、今から僅か6万年前に新人であるヒトは2回目のアウト・オブ・アフリカを果たして世界に拡がったとする「(現世人類)アフリカ単一起源説」が定説となった。

これは主に分子生物学の成果に拠り、1987年にR.L.キャンら¹⁰が母親からのみ子へ受け継がれるミトコンドリアDNAの研究から、現生人類は16±4万年前の多分アフリカの女性から派生したとした研究を端緒とする。この仮定の女性は「ミトコンドリア・イヴ」とジャーナリズム¹¹によって名付けられ、あたかも全ての人類はたった一人の(それもキリスト教徒の)女性から生まれたかの印象を与えた(図版2)。

それは間違いであるが、我々の種は僅か10万年前に誕生し、6万年前からやっと世界に拡散したのであるから、少なくとも生物的に「人種」の設定に意味がないことも認識できる。それは気候条件等に対する単なる身体上の適応であり、知的能力や人間性とは一切関係がないので、現在では否定されている。未だに根強い概念としてある「人種」という絶対的真理は存在しなく、差別の生物学的な根拠はない。原始からの相対的視座により、冷静な世界観を獲得できる。



図版1 ヒトの系統樹

不遜な存在としてのヒト～それを支える文化と教育

一般に生物は自然環境のみを舞台としてそれに適応するように進化した。しかし人間は反自然的な存在であり、自然環境に加え文化環境を創出し、これら2つの環境への適応と淘汰によって進展してきた。進化を自然という造物主から奪い取り自己決定に委ねる不遜な力を持つのが我々なのである。文化環境が、自然の進化法則から外れたヒトの未来を決定し、しかも文化とは明暗を半々に内包した諸刃の剣なのである。

ヒトの最大の特徴は直立二足歩行にある¹²。180万年程前には、直立した原人「ホモ・エレクトゥス」が出現し身体が大型化すると共に脳も大型化するが、それは一方で二足歩行に適して変化した骨盤における産道の縮小と利益相反する現象であり、頭蓋骨が大型化した胎児は母親の骨盤を通過することが困難となった。この袋小路状態の打開策としてヒトは未熟状態で胎児を出産せざるを得なくなる。脆弱なヒトの新生児は親の完全な養育に頼る幼児期が顕著に長期化し「成長遅滞」というリスクが生じた。それは親の側から観れば子が独立するまでの教育期間の長期化であり、教養育てることに秀でた親の子ほど生存率が高くなることを意味する。子の側から観れば、受容あるいは学習期間の長期化であり、模倣する能力と親への欲求伝達というコミュニケーション能力に優れた個体ほど生存率が高くなることを意味する。これが教育の重要性の根源である。(漢字の「育」は、「月」(肉月)と、「子」の転倒した姿から成り出産場面を象るが、まさに教育の原点を表している。)

その教育と学習の長期化はもはや動物における「個体差」ではなく、「個人差」とも言うべきヒトの個における能力差の拡大と能力の種類の多様化を促した。特に優れた個の特有の能力と知恵を、個別能力としてその個に限定・閉塞し、その個体の死と共に失うことのないように、知的財産として模倣により集団内で水平に共有・拡大し、世代を超えて垂直に継承する行為が情報伝達としての教育である。同時に教育による特定の個の能力の開発・伸長が集団全体の利益となった。(高度経済成長後の日本では大学教育・研究の受益者は学生個人であるとの認識が強いが、受益者は根本的には社会であり、ゆえに社会・国が責任を持つべきと



図版2 「ミトコンドリア・イヴ」

の再認識が必要である。)

かくしてヒトにおいては先天的な遺伝子上の生存本能のプログラムよりも、後天的に学習・模倣という教育行為で継承・獲得した知識と能力がより重要になり、その集積を文化と呼ぶ。教育によりヒトは自然という舞台とは別に文化という舞台を自分で創造し、未来の選択・決定権を自然の創造主から傲慢にも奪い取ったのである。

即ち人文科学が扱う文化環境とはそれほど大きなことであり、ゆえにそれを扱う事に矜持と覚悟を持つべきなのである。人文科学あるいは教養教育の中心的目標は、理系の学問を管理誘導し、個体としての幸せと種としての幸せ、文化環境と自然環境の両立、自利利他円満の方法を探ることである。

またヒトのみが自然環境に加え文化環境を持つだけでなく後者の中でのみ生きており、自ら作った文化環境や社会制度に依存し適応したヒトの特異な進化は「自己家畜化」とも呼ばれる。風雨から身を守る衣服や住居を作り、天敵に捕食されることもなく、埋葬を行い、その結果その死体さえ他の動物の栄養源となることがない。弱肉強食の頂点のライオンでさえその死体は他の生物に供されるが、人間のみは諸生物が作る共生共死による循環から、自らの意志で外れている¹³。相対化の視座は我々の傲慢さを曝す。

すると他の生物の役に立たない人間の生、とりわけ死の価値は同属である他の人間に精神的栄養を供することにある。ゆえに人間のみが既に死んでいるソクラテスや他の多くの有名無名の生と死を語り継ぎ、それを賜り物として文化を成熟させるのである。人間のみ

が世代を超えた未来の人間の為にも死ぬ。人間の場合、時に生に執着するよりも死を選ぶことに大義があるのはこの為である。既に荻生徂徠が「学問は歴史に極まり候事二候」(『答問書』)と述べているように、人文科学の根本が歴史学に尽きる理由はここにある。そして史学が死学でない¹⁴理由もここにある。それは先人の生と死こそが、生きている我々が今日と明日を作る栄養源となっているからである。

これからの教育のありかた～消えたヒトから学ぶ

前述のように別系統のヒトが何種類も同時存在することの方が常態であった。人類史とはその後消えて行く運命の古いヒトと、時代を切り開いて行く新しいヒトの交代劇の歴史に他ならない。ホモ・サピエンスがひとりだけになった現状の方が異常でありごく最近のことなのである。

すると相対化した遠大な視座に立って観れば、我々も次の交替劇に向かっている渦中にあることになる¹⁵。一方で、目下は地球上に我々に取って代わる交替要員は見当たらない。しかしこれまでを冷静に振り返ればおそらくそれはいつか出現するであろう。

ヒトはかつて地球上のほぼ全面というこれほどの範囲に分布し、かつこれほどの人口を経験した事がないからである。前1万年頃に最終氷河期が終了し安定した環境状態に入り、且つ大陸も安定し南極以外の四大陸に人類が定住しだした後期旧石器時代末期の人口は1,000~2,000万人と推定される。これは現在の総人口67億の1割以下である。当時は圧倒的な自然環境の中にヒトと、ヒトによる人工物(石器や道具や造形芸術など)がまばらに挿入されている状況であったから、文化の形成と展開には悠長な時間がかかった。

またその人工物(衣服、靴、住居等)によって、現生人類は体表面の環境をなるべく統一的・恒常的に維持し、加熱料理等によって様々な動植物の相に対応しつつ、地球全域に展開しながらも同一種であることを保った。その苛酷な環境対応の中で精神が「折れる」ことを防ぐ装置としての「天国」の発明も究極の人工物と見なすべきであろう。その結果、現生人類は広い地球上の誰とでも子を作る事ができ且つその世代(F1)がさらに子供を作る事ができる事は、自然界

一般から観たらまさに驚異的な事である。これは全ての我々が、我々を覆う衣服や靴から天国に至るまでの文化という環境によって人工的均質化を達成しているからである。それゆえに異なる自然環境に棲息していても人体には変異と特化が起こらず、人間では種分化がまだ起きていない。人間は最も進化しているが、脳と視覚以外は特化した形質を持たない。もしも文化環境という人工物がなければ我々はいとも簡単に特化し種分化し、ダーウィンのフィンチ類、今西錦司のカゲロウのように棲み分けが行われたであろう。

しかしながら、かつて経験した事がないほどの人口が地球全表面そして宇宙空間にまで展開している現在では、いくら衣服等だけでなく外・内燃機関やインターネットの発達によって遺伝子の交流を活発に保っても、生態的隔離、行動的隔離、時間的隔離が起こるのは必定ではないだろうか。過剰人口が全てを加速し、かつ文化は、従来はヒトの種分化を阻止したが、一方で隔離を促し棲み分けを惹き起こさせ固定化する装置でもあるからである¹⁶。(「電車男」と「エルメス」は棲み分けており本来は会はずがいないから物語になった。)

そのような時、目下は最後の交代劇である旧人ネアンデルタールと新人クロマニヨンを考察する事は意味がある¹⁷。すると、両者は同時代に共存していただけでなく、その差が僅かであり、しかしその僅かな差で彼方は絶滅し我々は繁栄しているに過ぎないことが判る。

その違いは環境適応能力である。7万~2万2千年前頃のヨーロッパにおける両者の遺跡分布の変化(図版3)を見ると、旧人ネアンデルタールは寒冷期には南へ、温暖期には北へと移動している。この行動パターンは絶滅まで続くが、この気候変動に合わせた南北移動は好適環境適応で、生活適地を求めての移住行動でしかない。一方4万7千年前から入植してくる新人オーリナシアン・クロマニヨンは、最初は旧人の間に遠慮がちに進出する。しかし寒冷化すると、例によって南下する旧人の跡地に進出するだけでなく、かつて旧人が進出しなかった北緯50度以上の高緯度地域にも進出し圧倒的に席捲し勢力範囲を拡大する。結果として旧人社会はさらに分散し分断される。3万7千年前には別の「道具箱」(日常的に使用された道具類のセット)

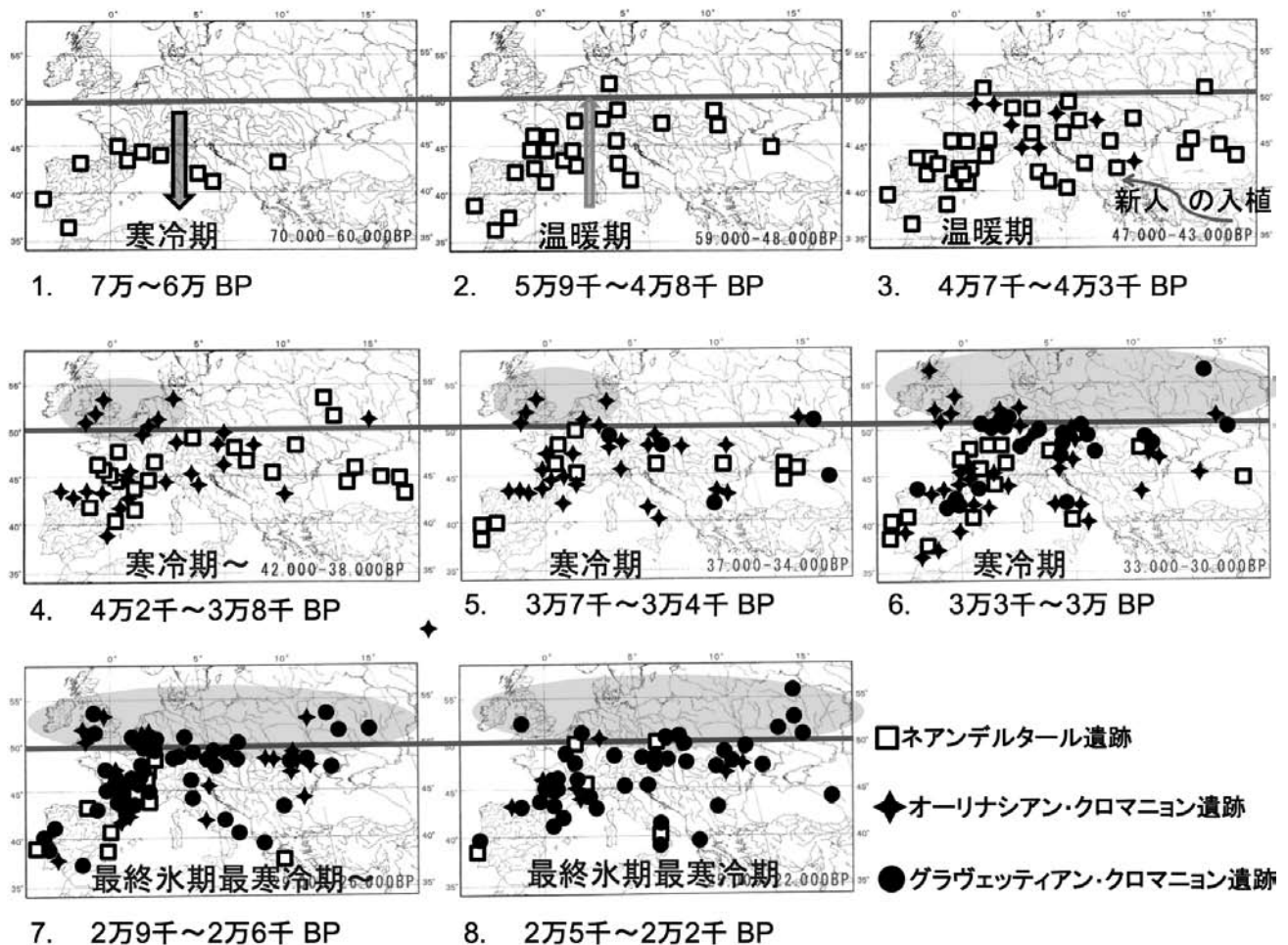
を携えた新人グラヴェッティアン・クロマニオンも登場し交替最終劇が開幕する。最終氷期の最寒冷期に向けて寒冷化が進行する中、三者の推移は明瞭で状況はさらに進展する。つまり旧人は気候変動に左右された南北移動という適応行動を取るだけであるが、特にグラヴェッティアン・クロマニオンは回避することなく高緯度に進出し生活適地を自ら創出した。つまり、環境に対する適応手段の開発能力に差があったのである。

旧人ネアンデルタールの「道具箱」は20万～3万年前の17万年の間、殆ど変化せず単調で、それは単純作業用の単体石器のみであり狩猟具もない。ゆえに最終氷河期最寒冷期突入と新人サピエンス（クロマニオン）の登場という環境の変化に抗しきれずに絶滅する。一方ホモ・サピエンスの「道具箱」は4万～1万2千年前に、僅か1万年程の間隔で次々に急速に多彩に変化し、素材の多様化、特化、狩猟具、部品組み合わせシステムと加工工具等の発明を生み出し、それに

より環境変化に抗して生き延びただけでなく、後代には環境を変化させる環境技術（その最初の革命的な技術が農業である）を生み出して行く。これはそのまま我々現代人の特徴である。

この絶え間ない技術革新の惹起は優れた教育によるものであることは言うまでもなく、それが我々ホモ・サピエンスの特徴であり、強さの源泉である。技術革新の研究のみならず、教育の為の制度としての大学の重要性が再認識される。

文化とはこのように教育によって創り上げられ共有され維持されそして改善されるものである。より正確には、世代間の教育を重ねつつ常に技術革新によって文化を改善し得たヒトの系統のみが生き存え、我々現生人類ホモ・サピエンスとして現在の繁栄に至っている。教育によって我々は地球上で、水平的に最も広く分布するという意味においても、他の動物のみならず自然環境そのものの上にも君臨するという意味において



図版3 ネアンデルタールとクロマニオンの遺跡分布の変化

も支配的な唯一の種となった。

それは同時に、上述のように、我々が己を含めた全員の全ての決定権を掌握した独善的存在であることと且つ地球上において当面は我々以外の他のヒトという交代要員がないことも意味する。よってこれまでは繁栄の原因であった教育は、その機能を、圧倒的支配種としての自己内省と、これまでの歴史への反省へと舵取りをすべきである。教育目的の変化あるいは多様化が、今後のさらなるホモ・サピエンスの存続と繁栄に不可欠である。

これからの教育のありかた～農業という原罪からさらに学ぶ

特に最近1万年程前に我々は農業という優れた環境技術の「禁断の林檎」¹⁸を嚙り、いやさらに繁栄して以来、我々は後戻りができない。それどころか、今後もしこの農業という生業に失敗すれば、シュメル文明のウル第三王朝や倭蘭でのような崩壊現象が今度は世界規模でおこる。

かつては最古の都市文明として繁栄したシュメル文明から学ぶことは以下である。この古代文明は人工灌漑による農業で繁栄したが、それによる塩害で滅亡した。農業とは優れた環境技術であるが、それがそのまま環境破壊であるというのは極論であるとしても自然に一定の負荷をかけていること、そして文明の繁栄の原因が滅亡の原因となることである¹⁹。

まして現在は、農業の開始、食料の貯蔵と調理の為の土器の登場などの「新石器革命」²⁰の後、18-19世紀の産業革命、電気・石油による第二次産業革命、原子力による第三次産業革命を経て、上述のトランス・サイエンスの時代に突入している。ならば現代世界における教育の目的は、これまでの人類の右肩上がりの繁栄史における場合とは大きく異なるのである。

確かに林檎を嚙ってしまった以上、存続のために従来通りこれからも技術革新の為の教育（特に理系の専門教育）と人間社会維持の為の教育（法学、経済学などの専門教育）は必要である。しかしこれからは自己とその限界を知ることにより絶滅を避ける方法をこそ、教育の主目的（教養教育）としないといけない。現代はかつて人類史上に無かったような教育における

画期的な大きな舵取りが迫られているのであり、「繁栄のための教育」から「内省のための教育」へとその主目的を変更することが、この人類の再びの「テルモピュライ（熱い隘路）」を抜け出す唯一の路ではないか。ホモ・エドゥカンドムである人間には、個と種の存続の為に否応なしに「教育が必要」であったが、同時にホモ・エドゥカンドムである人間には「教育が可能」なのであり、むしろ人類における真に能動的な教育とは、己を知り己の行く先を己で探ることにあるのではないだろうか²¹。

古代アンデス文明～文明とその発展の概念の相対化

相対的視座は遠大な位置に設定することが有効であるとしてそれを原始・古代史に設定し、その三角測量から見えるものを考察してきた。その際に知らずと西洋中心の考察を行っていること、即ちその思考概念の枠に陥っている事に留意しないとイケない。

アフリカ単一起源説が正しいことは、旧人と新人の交替劇は世界各地で起こったことを意味する。しかし現実には種々の条件から研究が進んでいるヨーロッパ地域におけるネアンデルタールとクロマニヨンを考察の対象としてしまう。シュメル文明の研究が進んだのも、この地が西洋人にとりキリスト教の起源研究としての聖書考古学の対象であるからである。都市ウルは『旧約聖書』で「カルデアのウル」としてアブラハムの故郷とされ、バベルの塔のモデルもここに求められる。

さらに普遍的にシュメル文明は、近代西洋人にとって、人類の産業革命以降の発展モデルとして都合が良かったのである²²。都市文明が栄え、天文学や六十進法などの科学的発達があり、特に物事を突き詰めて探求するその思考方法は、デカルトの要素還元主義の原形とも言える。

シュメル文明研究から導き出された文明成立過程に関するモデルはたしかに有効である。農耕の発展による余剰農産物が、富の偏在、社会階級・専門的職業を誕生させ、社会の垂直・水平方向の相互依存・相乗効果が高まり文明が形成され、さらに他文明との交流(交易や戦争)により文明発展が加速されるとする図式は、少なくともユーラシア大陸と古代エジプト文明に適応

できるかなり普遍的なものである。

しかしそれは決して絶対の「公式」ではない。例えば日本列島を考慮すれば、農耕開始の時期の早さによって文明発展の度合いを測るのは単純化しすぎた文明史観であることが判る。ナラ、クリ、カエデ、シナノキなどの温帯落葉広葉樹林の東日本の狩猟採集文化（縄文文化）は、堅果類、シカ、ウサギ、サケ、マス、イワナ等の豊かな食料に恵まれ、それに保証された人間生活は極めて充実していた為に、稲作（照葉樹林・農耕・弥生文化）へと急ぎ転換する必要がなかったのである²³。

すると西洋中心の世界観からの脱却を図って相対的視座を確保する為に、南アメリカ大陸の古代アンデス文明に注目する必要がある²⁴。

ペルーでは近年、カラル遺跡（前2,600-2,000年頃の都市遺跡）、クントゥル・ワシ遺跡（前1,000年～紀元前後）等が発掘され、中央アンデス北部中央高地東斜面のコトシュ遺跡からは、最古の無土器層の前2,500年頃のミト期の層から「交差した手の神殿」等が発見された。さらに、土器がまだ制作されていない先土器文化のこの神殿では、「神殿更新」が行われていたことも判明した。神殿を一定期間ごとに壊し埋め、その上に新しい神殿を造るのである。

これは従来のシュメル・西洋型文明発展史観への逆説である。従来は、農耕定住開始→農耕の発達→余剰農産物→その後に宗教施設が出現すると考えられた。「富の蓄積とそれによる発展」と言う、現代の我々にも実にわかりやすい「衣食足りて礼節を知る」モデルである。

しかし古代アンデスでは、集約農耕が成立するよりも早く、つまり余剰農産物どころか土器すらなかった時代、農耕定住が始まったばかりで辛うじて食べていけるかどうかの段階、クニが成立する前段階で、宗教施設が出現し、その神殿が度々更新建設されていたのである。祭儀施設を中心とした恒久的の共同体における体系的宗教の発生により、閉鎖的な農民共同体を越える広汎で大規模な社会協力・統合体制が宗教の統合力によって可能となったとされる。神殿の規模、豪華さ、埋葬品の豊かさは他の古代文明と比べても遜色はない。この「礼節足りて衣食を知る」モデルは、従来の

唯物論的進化のイメージと全く反対・逆転の文明展開を示した。

南アメリカの厳しい自然環境のゆえに人口稠密化が困難で農業収穫にも限界があるという、ユーラシア大陸とは異なる風土が根本にあるが、そもそもそれにも関わらず世界には「共通の文明展開過程」（＝一つの真理）があるとする前提がおかしいのである。特定のパターンに囚われない為に相対的視座が必須であるまた別の事例である。

ユーラシア大陸史観～「世界史」と「世界観」の相対化

筆者は相対的視座の重要性を信奉するあまりに西洋中心史観を否定するものでは毛頭ない。それは脱亜入欧以来の取り敢えず正しい歴史的選択・伝統であったことは、日英同盟を結んでいる間は常に勝利していたことから端的にわかる。同時に、我々が日本列島に歴史的存在としてある以上、日本中心史観あるいは中華史観はむしろ当然のことだろう。

しかし学問一般において、研究によって新知見を得て世界観を一段階上に昇華する行為は、それまでの成果や価値観に反「大勢」（反体制ではない）の態度をとることに始まる²⁵。またこれまで観てきたように文明そのものが本来相対的な存在なのである。

すると相対的な史観として、もうひとつの世界観、我々がその東端に属しているユーラシア大陸全体からみる世界観をも併せ持つことは極めて重要なのではないだろうか²⁶。外・内燃機関発明以前には生産単位は人間であり、そのエネルギー源である食糧を安定供給する農業に従事する農耕定住文明がユーラシア大陸の暖かい南部には幾つも栄え、同時に北方には馬の原産地を背景として遊牧騎馬文明が栄え、且つその間には天然の「高速道路」を内包した空間であったからである。西洋は辺境でしかなく、ユーラシア大陸こそが17世紀くらいまで世界の中心であったのである。

しかしこの地の研究は、西洋あるいは東洋を扱う学問の間に陥り、旧ソ連圏が多い事、現在の自然・政治環境が厳しい事も相まって、世界史上極めて重要なのに遅滞が著しい。

筆者が専門とする古代ギリシア・ローマ世界等の地

地中海世界の認識においても、ユーラシア大陸は重要である。つまり地中海世界は地中海域だけではなく、それはユーラシア大陸全体なのである²⁷。平和な交易から戦争までの様々な交流手段により地中海文明はユーラシア大陸に広く伝播し、その伝播力の強さが後の西洋文明を含んだ地中海文明の特徴である。そもそも「ヘレニズム」はギリシア外へと広がったギリシア文明を意味する。するとギリシア内のギリシア文明だけではギリシア文明を把握できない。

また伝播先でこそ源流の特徴が顕現する。ギリシア美術の第一の特徴はアントロポモルフィズム（神人同形主義）であり、故に普遍性と伝播力が強いのだが、おそらくそれはクシャン朝下のガンダーラとマトゥラーにおける仏像創造の起因となった。つまりアレクサンドロス大王東征以来、セレウコス朝、グレコ・バクトリア王国、パルティア、クシャン朝と中央アジアに連綿と存続したアントロポモルフィズムは、クシャン朝がヒンドゥークシュ山脈を越え新しくインドの仏教という宗教に出会った時、従来造られなかった仏像（釈尊の似姿）の創造を促したのである。すると極めて広義には、仏像もヘレニズムの発展形と捉えることもできよう。

以上からギリシア文明の研究には、中央アジアにおけるヘレニズム研究、大王のバクトリア・ソグディアナ遠征の研究が不可欠である。それは東征のうちの2年程の地味な期間だが、ベッソス捕縛はペルシアの正統なる後継者になる為に必要な重大事であり、ロクサネとの出会・結婚は「東西融合」を象徴する。

しかし研究遅滞が著しいことに加え、仏教学でない、地中海側からの観点の研究は殆どない。ディオドロス等の文献史料は大王東征当時の状況を伝えるが、それらは大王時代から400年程を経ているのである。一方、考古学的史料は動産（コイン等）しかなく、確実に大規模データ群たる不動産（遺構）は2千年間欠如していた。1965年にアフガニスタンで偶然発見されたギリシア系都市アイ・ハヌンの発掘はソ連軍侵攻により放棄された。

以上を鑑み、筆者は中央ユーラシアのバクトリア地方におけるギリシア系都市の発掘を計画した。歴史学の基本作業は第一次史料の発見と提示である。発掘な

る方法論は人文科学の中でも極めて実証的で、アイデアや概念は空砲である場合もあるが、遺物や遺構は必ずや実弾である。

斯くして筆者はウズベキスタンとアフガニスタンの国境のアムダリア右岸の渡河点にある都市遺構カンピール・テパを発掘調査している。東西に流れる大河を南北に横切るこの地はシルクロード上の要地であるのみならず、渡河点を護るアケメネス朝の要塞の存在、アッリアノス等との一致から、ここで大王が渡河したと考える。クシャン朝の後2世紀のカニシカ王時代に放棄されたこの都市のツィタデリ（アクロポリス）を筆者は現在、前300年頃のセレウコス朝時代まで掘下げているが、上層からは仏教系遺物が、下層からはギリシア系遺物が出土する将に東西文明の十字路である。

それを如実に示すのが接吻する人物を表したテラコッタ製出土遺物（図版4）である。その顎の下に手をやる求愛ポーズ、女性のヌードの背中へヘレニズム的要素であり、一方その髪はハリティー（鬼子母神）、ミトゥナ、賢者の子裁判（ソロモン王・大岡越前守政談）の女性像の髪型や菩薩の束髪等を類型とするインド的要素であり、東西両要素が混系する。人物像全体はギリシアの図像との比較研究から《ディオニュソスとアリアドネ》であると同定でき、よってこの地にディオニュソス教が伝播しその信者がいたことが判明した。

ここで問われるのは従来の「ヘレニズム」の概念である。中央アジアのギリシア図像を総覧すると、ディオニュソス等の特定の図像が多い。つまりギリシアの図像は、アジアに選択され伝播しているのである。ならば西の伝播力の強さと同時に、東における吸引力の存在とその強さを認めるべきである。西から東に文化は流れ落ちてゆくのも、両者の関係は「西高東低」でもない。東の視座から見た吸引力を、これからの「ヘレニズム」の概念においては設定すべきである。（例えば日本文明自体が、東の優れた吸引力のよき事例である。）

オリエントにおける最大の吸引力の磁場は仏教である。「共通の言語体系」として大陸に遍在する「グローバル」なヘレニズム図像は、「個々の土地での文脈・物語」で「ローカル」な仏教の中へ吸引されて行く。その時、ヘレニズム図像は初期は未消化で無機的に仏

像に併置された（サラダ状態）が，次第に有機的に融合していった（スープあるいは坩堝状態）。

しかしローカルに取り込まれるグローバルであるヘレニズム図像の宗教的意味の変容の研究では従来、「西」及び「俗」からの視座が欠如していた。仏教は「東」の東洋人のもので、「聖」なる「宗教」としか捉えられてなく、「西」，「俗」及び「文化」としての認識が欠如していた。それは出家者の観点からの經典依拠の研究方法の弊害である。即ち「西」で「俗」な存在である「在家ギリシア人仏教徒」の視座からの，特に造形という言葉に依拠した研究がこれからは必要である。

特に例えば接吻などという俗な，つまり基層文化に属した，人間に普遍的な行為を表現した造形は，文明・宗教・言語の違いを軽々と越えてシルクロードを渡り，それぞれの地のローカルな文脈の中で変容してゆく。インドと中央アジアで創造された仏像も，それに乗り中国へと漢時代に伝わるのである。

ここにおいて従来の「シルクロード」の概念も変更が迫られる。従来は西の中心（ローマやコンスタンティノポリス）と東の中心（長安や奈良）にのみ視座があり，その間は単なる「ロード」であった。しかしユーラシア大陸は単なる東西間の通路でも中継地でもなく，そこもまたローカルな物語を持つ自己完結した世界であり，造形や思想を変容させ新たなものを創造する場なのである。

かつて「シルクロード史観批判」²⁸では南部オアシス定住民と北部草原テュルク系遊牧民との間の南北関係が強調された。しかし結局は東も西も南も北も大事なのであり，従ってユーラシア大陸全体に文明の複数の十字路あるいはインターネットがあると捉え，そこも新しい文化の創造地・発信地であると再認識すべきである。

また中国への，さらには欽明天皇における日本への仏教伝播を考えるとときには，尖兵としての美術の役割を重視しないといけない。そうでなくては仏教という「あらゆる神秘性を排除し，神も奇跡もなく，宗教儀礼もおこなわず，ただ縁起の論理を理解し，信仰の裏づけのない倫理と禁欲生活とのみを要請するような宗教に，数千の無知な大衆がどうしてついてゆけたであろうか」²⁹。光彩陸離たる美術の存在が無く，極めて



図版4 《ディオニュソスとアリアドネ》ウズベキスタン共和国カンピール・テバ出土 テラコッタ製 前1世紀から後1世紀

禁欲的な教理はそのままでは，俗な「数千の無知な大衆」に対して伝播力を有する筈がない。

そもそも釈尊の涅槃に際し，小乗系涅槃經典³⁰に拠ると阿難の質問に釈尊は，四つ辻に舍利塔を建てそれを礼拝すれば「生獲福利，死得生天」と答える。つまり初期から仏教教団は，聖と俗のそれぞれ，つまり欲望を絶ち修業に励む出家者と共に，現世と来世の福利・安楽を求める土俗信仰的な在家者を容認していたのである。

中国への仏教初伝の考古学的証拠は，中原ではなく成都を中心とした長江流域にある。後漢時代後期の墓の副葬品である揺銭樹がそれで，そこでは仏教東伝の過程で，釈尊は王，神，天として認識されていた。そこには多く接吻図像が伴い，仏教の尖兵として初伝した享樂的性格で現世利益を担う仏像と共に，死後の俗で理想的・享樂的観念を体現するものとして東漸していたと考えられる。舍利塔信仰中心の俗なる仏教の基層が，クシャン朝下に中央ユーラシアから西北インドで接吻・性愛像を，布教の方便，つまり俗な衆生の性質や能力に応ずるという意味での図像による「対機説

法」として利用し、それが長江流域に東伝したのである。

一般に造形芸術とはヒトの宇宙認識の視覚的表現であり、つまりその歴史はヒトの視覚的哲学史に他ならない。また文献史料に比してバイアスも少ない。そもそも造形（芸術）しか史料として存在しない先史時代が人類史の大半を占める。したがって文献（文字史料）も重要だが、造形芸術の哲学として、そして史料としての重要性はもっと強調されるべきである。

以上、歴史研究において「聖」及び「文字史料」だけでなく、相対的視座による方法論として「俗」と「造形芸術史料」にも依拠すると、学問の展開と世界観が変化することを示した。

Ⅲ. 教養の必要～だが今はまだ前夜だ

大学と学問～高まる相対化の場としての重要性

これまで相対化の視座の有効性を検証してきた。特に相対化の視座が最も有効に働く原始・古代史を中心に、地理的にも離れた古代アンデスをも視野に入れつつ、その有効性を検証してきた。古代に立ち戻って相対化する重要性は、同時に、教養教育に於ける歴史学、特に古代史の重要性の証左ともなった。

そして相対化とは、絶対的真理に縋らないで、自分で立つ強さ、一つの真理でなく、幾つもの事実を考察する態度であるならば、理系学問におけるだけでなく、そもそも大学と学問そのものが相対化の場であった。

しかも最近は特に大学に於ける相対化の教育の重要性がさらに高まったのではないだろうか。従来大学は学問の府として「学問の再生産の場」であることがその最大の機能であった。しかし、現在それだけでは社会的に不都合が出てきている。これからは大学をより積極的に「対象を相対化する能力（＝学問の特徴）を鍛える場」と認識し、その結果、専門研究者としてだけでなく、市民・日本国民としても重要な能力を培う場と認識とすべきである。

頭にも「マッスル」がある。そして大学は教会ではない。一つの真理に縋ることが許されず、大学では幾つもの事実の妥当性を自分で科学的に吟味しないといけない。それが脳という筋肉を鍛える訓練であり、そ

れは従来のように優れた専門分野の人材育成へつながらると同時に、優れた市民を形成する。それは古代ギリシアの市民教育で重視された体の筋肉育成の体育練習場の系譜に直接繋がるのであるが、さらに脳のマッスルも鍛える為の新しい意味での「ギムナシウム」としての大学の意義をもっと強調すべきであろう。

一般に、社会の構成員によって価値観が共有されている時には、改めて価値観が問われることはない。しかし社会が一元的でなくなったときに、価値を理論的にわかりやすく定義し、広い世界で水平方向に、そして特に世代間を垂直方向に価値を伝達する手段としての教育の存在感が高まる。明らかに現代世界、そこにおける社会構成員再生産の装置である教育現場では、常に社会の価値観が厳しく問われ、再定義されている。同時に多種多様であるからこそ、一方で教育の一様化・検定化が進む。今後世界はさらに多様化・多元化に向かい、そこではあらゆる価値観が常に再検討の対象となるので強力な脳のマッスルが求められる。価値観を改訂しつつ次世代に繋げる場・装置であり、社会として「連続する生（ゾーエー）」に達する唯一の手段である教育の重要性は今後益々重くなるであろう。

特に日本においては、東北大学の末光眞希教授によれば³¹、従来は「良設定問題（well-posed problem, 解が一意に存在する問題）」を、坂の上の雲を目指しつつ皆で懸命に解けばよかった。脱亜入欧、殖産興業、富国強兵、鬼畜米英、一億玉砕、所得倍増計画、高度経済成長等であり、日本人はこのような思考方法と行動を得意とする。しかし現代そして未来の日本はそうではない。（但し2009年ワールド・カップは久しぶりの素直な良設定問題であったから国民が一丸でナイーブな愛国主義に酔うことができた。）今我々は「不良設定問題（ill-posed problem）」を解かないといけない。（政治世界だけみても、多くの与党・野党が存在する。）そこでは解くべき関数を自力で追加設定する必要がある、且つ解は複数個存在する。それを解く強い脳のマッスル、一つの「解」や「真理」に縋らずに対象を相対化する力が必要なのである。その力を養成する最も強力で指導的な場は大学の教養教育である。

実は、そのことは既に中教審により「学士力」（学士課程であればどのような専門分野においても共通に

培うべき学習成果)³²として提言されている。答申にある「知識・理解（専攻する特定の学問分野における基本的知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する）」（下線筆者）、「他文化・異文化に関する知識の理解」、「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」とされる「学士力」とは、正に「対象を相対化する能力」に他ならない。幾つもの事実を客観的・批判的に統合し判断する力、即ち「相対化する力」の涵養が大学教育（特に教養課程）の中心的・公的目標なのである。

相対化の哲学～その目指すところ

人間とその文化と科学の奢りを原始・古代時代からの長い眼で相対化する視座は、最終的にどのような力強い哲学へと向かうのか。

レヴィ＝ストロース（および川田順造氏）³³によって、人間とは自然の一部でありながら文化によって自己異化を試みた存在であること、ごく最近まで複数の人間が存在したことから人間は決して特別な存在ではないこと、しかしネアンデルタールという最後の交替要員を失いひとりになった存在、そして人間の文化とは自然史の微小部分、東の間の異化でしかないことが自覚される。このラディカル（革新的）で明るいペシミスト（冷徹さ）は、昨今の「エコ」「地球環境保護」などは「人間第一主義」の「人間生き残りの為の自然維持論」でしかないと看破する。

人間以外の異種という他者をも含んだ自然界全体への共感からは、人間の立場に立つが、安易な人間礼賛ではない真の共感が生まれる³⁴。するとヒト間の倫理関係（つまり体外受精等による様々な人間関係）は勿論、異種間倫理に関してはヒト、ウシ、ブタ、トウモロコシ等の間のBSE等で露見したような倫理問題、魚類発生工学ではサバにマグロを産ませるようなキメラ魚における倫理関係を考えるべきであり、さらに将来は異星間（異性間でなく）倫理も視野に入れるべきであろう。

このように科学と人文社会との間の連続性を構築し、両分野における、ヒトと銀河系外の異星の環境までをも含んだ自然を射程にいられた相対化の視座が必要

であり、その責務は教養教育しか負うことができない。

教養～「時代の問題と切り結ぶための知恵」の実学

しかし現在、日本の大学では実学が重視されている。実学は医学、法学、経済学、工学といった実生活に役立つ学問とされ、教養教育はその反対語のように扱われる。広辞苑にも実学は「実際に役立つ学問、応用を旨とする科学」とある。

では日本で実学を提唱し、その重要性を鼓吹し、それによって日本の近代化を押し進めた福沢諭吉はどのように述べているか。

確かに福沢は、いろは、手紙の書き方、帳簿の付け方、そろばん、天秤の取り扱い方（これらは現在の小学生低学年レベルの基本要項であろう）を心得ることがまず大事であると言う³⁵。しかし、さらに「進んで学ぶべき簡条は甚だ多し」として、地理学、究理学、経済学などとともに、歴史学と修身学を挙げる。

福翁自伝においては、教育の方針は「有形において数理学（物理学）と、無形において独立心」にあり、それは「近く論ずれば今のいわゆる立国の有らん限り、遠く思えば人類のあらん限り、人間万事、数理の外に逸することは叶わず、独立の外に依るところなしといふべきこの大切なる一義」だと述べる。さらに「我が慶応義塾に於て初学を導くに専ら物理学を以てして恰も諸科の予備（根本）と為す」（『物理学之要用』）とも、「東西学の差異は物理学の根本に拠ると拠らざるとの差異にあるのみ」（『続福翁百話』）とも述べ、物理学こそがあらゆる学問の基底たる学問のなかの学問であり、「一身独立して一国独立」の為の根本であると述べる。

しかしこれは倫理学を捨て精神よりも物質を中心価値とする唯物主義を標榜したのでも、学問の中心を人文社会から科学に移したのでもない。倫理と精神の軽視ではなくて、逆に物理学を学問の原形に置くことによる「新たなる倫理と精神の確立」を目指したのであり、「自然科学それ自体乃至その齎した諸結果よりも、むしろ根本的には近代自然科学を産み出す様な人間精神の在り方」³⁶を問題としたのである。

ゆえに福沢は日本が「文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨てて問わざる」³⁷のが問題であると憤

慨・糾弾する。彼の独立自尊主義を要約した二十九条の綱領は「修身要領」と題されている。彼が掲げた「独立独尊」とは修身あるいは倫理の問題に他ならない。

つまり、鷺田清一氏の述べる通り、福沢の主張する「実学」とは、「すぐに役立つ学問」を意味するのではなく、修身、道徳、あるいは「時代の問題と切り結ぶための知恵」³⁸なのである。そして同氏の指摘通り、しばしば西洋から批判されることだが、「日本のテクノロジーにはサイエンスがなく、そしてそのサイエンスにはフィロソフィーがない」。

今も、今こそ、真に必要とされる「実学」とは、現代と切り結ぶ「人間精神の在り方」あるいは「哲学」なのである。福沢はいわば新しい「教養主義」の必要を実学の立場から強調したのであり、これは遠く明治時代の過去の課題ではなく、「文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨てて問わざる」現代日本と、応用学をのみ重視し基礎学を軽視するその現代日本の大学においてこそ、今火急の必要である。

IV. 結び～世界と教育

本稿冒頭に教育とは、個別の有限の生である「ピオス」から、個体を越えて連続する生である「ゾーエー」へと繋げる行為であるとした。

そのような聖的行為を重ねつつ、しかしいつかレヴィ＝ストロースの言う「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」³⁹ その時まで、人類が文化でもって宇宙と切り結び、充実した生を力強く生きる為の手段を考える実学が教養教育なのである。

註

- 1 その有名な事例がイラク北部ザグロス山脈中の複合洞窟遺跡シャニダール洞窟最下層の中期旧石器文化層から9体検出されたネアンデルタール人の遺体で、特に4号男性遺体周囲の土から大量の花粉粒が発見され、死者に花を手向けて埋葬した物証であるとされた。但しこの解釈には近年異論も出されている R.S.Solecki, *Shanidar : The First Flower People*, New York 1971.
- 2 東北大学高等教育開発推進センター編の多数の「学

びの転換」に関する書籍及びHP『「学びの転換」を育む研究大学型少人数教育 (<http://www.he.tohoku.ac.jp/center/tgpm/2.html>)』(2010年11月08日閲覧) 参照。

- 3 それでもキャンパスで絶対的真理を囁く者がいたらそれは新興宗教の勧誘である場合が多いと、学生には忠告すべきである。
- 4 「全学教育」はあくまで大学組織内での位置付けを表した用語なので、本稿ではその本来の姿を表す言葉「教養教育」を用いる。
- 5 註2のHP参照。
- 6 青柳正規『古代都市ローマ』中央公論美術出版 1990 に詳しい。
- 7 鈴木博之「理工系領域における基礎学の位置とその危機」(日本学術会議哲学委員会主催シンポジウム『Humanities (人文学) と基礎学の危機』2007年12月8日於専修大学での提題)
- 8 A.M.Weinberg, "Science and Trans-Science" in *Minerva* 10, 1972, p.209.
- 9 岡田英弘『世界史の誕生』ちくま文庫 1998 p.32.
- 10 R.L.Cann, M.Stoneking, A.C.Wilson, "Mitochondrial DNA and human evolution" in *Nature* 325, 1987.
- 11 *Time*, 1987, 1.26; *Newsweek*, 1988.1.11.
- 12 青柳正規『人類文明の黎明と暮れ方』(興亡の世界史00巻) 講談社 2009, pp.40-61及び本稿のこれ以下の部分は青柳に依拠した拙稿「古代ギリシアにおける教育」『西アジアにおける教育の起源と展開』2011 pp.20ff. を本稿の趣旨に沿って加筆訂正した。
- 13 原田憲一「三つのつながりの中で生きる」『京都造形芸術大学芸術教育研究センター2009年度活動報告書』2010, pp.56f.
- 14 明治から昭和の近江の郷土史家中川泉三の言葉。『滋賀県内五館共同企画・中川泉三没後七〇年記念展』サンライズ出版 2009.
- 15 赤澤威「人類史の分かれ目－旧人ネアンデルタールと新人サピエンスの交替劇」『文化人類学』74巻4号別冊, 2010, p.519.
- 16 拙稿「まとうこと－古代ギリシアの女性の衣服を中心に」『比較芸術学』(京都造形芸術大学比較芸術学研究センター紀要) 3, 2008, pp.18-21.

- 17 赤澤2010に拠って考察を行う。
- 18 佐藤洋一郎『モンスーン農耕圏の人びとと植物』(ユーラシア農耕史1) 臨川書店 2008, pp.5f.
- 19 青柳2009, pp.206-210.
- 20 G.チャイルドによる優れた概念だが、人類が農耕を受け入れる過程は西アジアのコムギの場合3,000年以上かかったもので、最近では「革命」から受ける急激な社会変化とのイメージを消す為に「プロセス」と呼ぶ。
- 21 己を知ることが教育の新しい主目的であるならば、「内省のための教育」、自分を知ること、少なくとも知ろうとすることへと最初の舵取りを行ったのがソクラテスとそれに続く哲学者・教育者たちである。古代ギリシアの哲学と教育を知る重要性はここにある。そして爾来未だ我々は自己を知らないのであるから、古代の問いはそのまま現代の切実な問いである。但し古代ギリシアの教育については別稿で扱う。
- 22 青柳2009, pp.205f.
- 23 青柳2009, pp.162-164. さらに「もし東洋に西洋とは全然別箇の、独自の科学文明が発達していたならば、どんなに我々の社会の有様が今日とは違ったものになっていたであろうか」(谷崎潤一郎『陰影礼賛』(中公文庫p.14f.), 1932.)と思考実験をすることは楽しいが、それは「もはや今日になってしまった以上、もう一度逆戻りしてやり直す訳には行かないことは分かりきっている」不可能事であり、再現性のない人文科学ですらなく、「小説家の空想」でしかない。
- 24 加藤泰建、関雄二編『文明の創造力－古代アンデスの神殿と社会』角川書店 1998; 関雄二『アンデスの考古学』同成社 1997; 大貫良夫『アンデスの黄金』中公新書 2000; 関雄二『古代アンデス 権力の考古学』京都大学学術出版会 2006; 青柳2009, pp.250-272.
- 25 先行研究を覆す研究とは斯様に革新的であるべきことは、研究者は誰もが承知している。では良い学生とは素直で先生を信じる学生ではなく、先生に対して(面従腹誹は無益だが)面従腹背である学生である。「学びの転換」のキーワードとして「反「大勢」の勧め」と「天の邪鬼たれ」を追加すべきでないだろうか。
- 26 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史05巻) 講談社 2007. ユーラシア世界の重要性を強く主張する。
- 27 拙稿「属と聖の接吻－中央ユーラシア新出の「ディオニュソスとアリアドネ」テラコッタを中心として古代地中海世界から中国まで」『西洋美術研究』15, 2009, pp.16-39; 拙稿「中央アジアの古代地中海文明と古代オリエント」『地中海学会月報』336. この部分は以上の拙稿等を本稿の趣旨に沿って加筆訂正した。
- 28 間野英二『中央アジアの歴史: 草原とオアシスの世界』(講談社現代学術新書) 1977など。
- 29 渡辺照宏『お経の話』岩波新書1967, p.21.
- 30 Maha-parinibbana-suttanta (PTS本DN.2, pp.141-143); 『長阿含経』第3「遊行経」(大正1,20中以下); 『仏般泥洹経』卷下(大正1,169上以下); 『般泥洹経』卷下(大正1,186下以下); 『大般涅槃経』卷中(大正1,199下以下); 山田明爾「解脱と生天」(日本佛教学會年報59,1993), pp.65-78.
- 31 東北大学電気通信研究所末光眞希教授が2010年7月17日に物理教育学会東北支部総会で招待講演を行った際の卓見である。同月に東北大学キャンパスで氏から筆者が御教示いただいたことに篤く感謝申し上げます。
- 32 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申 2008年12月
- 33 川田順造「レヴィ＝ストロースにおける自然と文化」『思想』2008年12号
- 34 川田順造「『悲しき熱帯』のいま－四十六年ののちに」, C.レヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』(I巻 川田順造訳, 中央公論新社2001), pp.13-19.
- 35 福沢諭吉『学問のすゝめ』1876, 初編。
- 36 丸山眞男「福沢に於ける「実学」の転回」(初出『東洋文化研究』3号1947)(『福沢諭吉の哲学』岩波文庫所収)
- 37 福沢諭吉『文明論之概略』1875, 卷1第2章
- 38 鷺田清一「……or「教養」と「基礎学」」(註7前掲シンポジウムでの提題)
- 39 C.レヴィ＝ストロース 前掲書 pp.425f.

図版出典

1. 『日本人はるかな旅』展図録, 国立科学博物館, 2001, 図1-3; 2. Newsweek 1988年1月11日号表紙; 3. 赤澤2010, 図6～9に筆者加筆加工; 4. 筆者撮影。

附記

本研究は東北大学高等教育開発推進センター長裁量経費「平成22年度高等教育の開発推進に関する調査・研究経費」の助成を受けた「全学教育における歴史学の位置付け～特に「相対化する力」の観点からの古代史教育の重要性」による研究成果の一部である。深謝する次第である。また事例の一部は、科研「バクトリアのギリシア都市の美術・考古学調査—ウズベキスタン共和国カンピール・テパ」（基盤B海外・芳賀満）と科研「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究」（基盤A一般・宮治昭）の成果である。

附記2

本稿を投稿したのは2011年1月11日であった。その後3月11日の東北関東大震災と原発事故を経験して、トランス・サイエンスの時代に於ける文理融合の視座の重要性と教養教育に於ける歴史学の重要性と責任を、我々は益々認識せざるを得ない。今こそ我々は、この地球上の自然環境と人間が創り出した文化環境とを両立させ、平凡だがおだやかな幸せに満ちた桃花源での、個と社会のゆるやかなperpetuationを目指すべきであろう。それこそ全ての生物が究極的に求めていることに他ならない。